

平成29年度 第1回下野市教育委員会臨時会議事録

- 1 日 時 平成29年12月15日(金) 午後2時40分～午後3時40分
- 2 場 所 祇園小学校 1階 会議室(出前教育委員会)
- 3 出席委員 委 員 長 永山伸一
職務代理者 三橋明美
委 員 熊田裕子
委 員 石嶋和夫
教 育 長 池澤 勤
- 4 出席職員 教育次長 坪山 仁
教育総務課長 小谷野 雅美
学校教育課長 海老原 忠
生涯学習文化課長 近藤 善昭
文化財課長 山口 耕一
スポーツ振興課長 北條 均
教育総務課課長補佐 伊澤 仁一
教育総務課主幹 古橋 栄一
- 5 傍聴人 22名
- 6 討 議
「新学習指導要領の実施に向けて」～本市における学力向上について～

<p>永山委員長</p>	<p>委員長挨拶 議事録署名委員の指名 三橋委員及び熊田委員 討議に入る旨を伝える。 今回「『新学習指導要領の実施に向けて』～本市における学力向上について～」討議を行う。はじめに、新学習指導要領について概略説明をお願いする。</p>
<p>海老原学校教育課長</p>	<p>【説明要旨】 学習指導要領は10年に1度のペースで改訂が行われており、今回は平成29年3月に新学習指導要領が改訂された。今回は指導内容の見直しに留まらず、将来を見据え、急激な時代の変化の中でもその変化に対応していくことができる力や予測困難な未来社会に対応していくことができる力を育む必要性が前面に押し出された改革となっている。その力を育むために「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という3つのキーワードが掲げられている。 栃木県教育委員会においても新学習指導要領の改訂に対応できるよう、平成28年2月に「栃木県教育振興基本計画2020－教育ビジョンとちぎ－」を策定し、下都賀地区における「学校教育の重点」を定めている。 以下、資料「栃木県教育振興基本計画2020－教育ビジョンとちぎ－の概要」に基づき、基本理念や基本施策の概要説明を行う。同時に、資料「下都賀地区学校教育の重点ダイジェスト版」に基づき、重点目標や構想について概要説明を行う。 本市においても国や県の内容を受けて「下野市学校教育計画」を策定し、「当たり前のことを、当たり前にする！」のスローガンのもと、基本方針として重点目標を設定した。 以下、資料「IV下野市学校教育計画全体構想図」に基づき、本市における学校教育目標や基本方針に基づく重点目標等について説明を行う。</p>
<p>永山委員長 熊田委員</p>	<p>それでは委員の皆さんからご意見等はあるか。 本日の授業を拝見して、大人が面白いと思う授業は子どもにとっても興味をもって臨めるものだというのを、改めて実感したところである。学校では日々の生活において「当たり前のことを当たり前」を実践しているが、家庭においても宿題などは学習習慣として身に付け、これらを継続的に実施していくことが、学力の向上の実現につながっていくものと考えている。</p>
<p>三橋委員</p>	<p>教える側からすると、子どもたちが理解しているのか、いないのかに気付き、すぐにフォローできる体制を整えることが重要だと思う。 また、学力というものを勉強だけで捉えるのではなく、例えば健康や体力の向上といった面から考えていくことも必要だと思う。</p>
<p>石嶋委員</p>	<p>「学力とは何か」について色々な捉え方があると思うが、「学習指導要領に示されたものである」とおっしゃった方がいて、個人的に一番単純明快だなと納得している部分がある。もし、各教科のねらいや内容等が学力であると考えれば、学校で育てようとしていることは全て学力になると思う。テスト</p>

等で表されたものだけではなく、先ほど委員から発言があった、子どもたちが意欲的に集中して学習し続けられる状態こそ、学力を向上させるための一番の近道であると考えている。

下野市教育委員会として市内の学校を訪問させていただいているが、どの学校も子どもたちが一生懸命集中して授業に向かっており、先生方も子どもたちが集中できるよう試行錯誤しながら授業を行っている。中には飽きてしまう子や授業につまずいてしまう子もいるが、そのような子に対してはこれまでのように支援員の方がサポートを続けていくことが必要である。

また、子どもたちの生活が徐々に落ち着いてくると、勉強をしている振りがうまくなる場合がある。本当に学んでいるかどうか、振り返りを行ったり、提出物をチェックしたりしながら、今のような意欲がある形を維持していただければ、きっと学力向上につながるのではないかと考えている。

子どもたちに身に付けさせたい能力については、幼児教育の父と呼ばれた倉橋惣三さんの幼児教育の理念に「困難に突き当たりそれを解決しても疲れない子ども」というものがある。これは私自身も大切にしている理念である。子どもたちには大変なことに直面しても、それを克服して「さらにやるぞ」という気持ちを身に付けさせたいと考えている。困難を困難だと思ってしまうたら、乗り越えるだけで精一杯になり、次に進むことができないと思う。このような能力を日常生活の中で培っていくためには、人・物・心・時間というものを子ども自身が大切にすることが重要であり、これは自ら行動する力を身に付ける際の血となり肉となるものだと考えている。

こうした理念と呼応する形で、4年前に「当たり前のことを当たり前でやろう」という本市のスローガンと出会い、これは日替わりの理念ではなくじっくり腰を据えて取り組むべきものだと思い、実践してきたところである。

今後はこのスローガンのもと、授業をどのように展開していくか、全ての教育活動を通して何を学ばせるか、また、どのように学び何ができるようになるのか等について、次のステージに向かって進んでいく必要がある。

予測困難な問題に対応していく力を子どもたちに身に付けさせる理念は素晴らしいと思うとともに、学習指導要領で示されている目標を実現していくとなると、具体的には何をしたら良いのか、非常に難しい問題であると感じた。そこで参考となるのが、配付資料の「新学習指導要領実施に向けて『各校の課題（学力向上改善プラン）』」の課題である。例えば、課題の中に「読解力が弱い」や「記述式問題の正答率が低い」等があれば、やはり読書量が少ないのではないかという見解が出てくる。

下野市として子どもたちにもっと力を付けさせようとする場合、全国一律で相対的な目標が書かれている学習指導要領をもって「学力」と捉えることには少し違和感を覚える。本日の授業を参観して、私も学生の時にこのような授業を受けたかっと思えるものが多かった。先生一人ひとり若干の格差は生じてしまうと思うが、昔に比べて授業の質は上がってきたと感じている。あの先生の授業のここが良かったから真似てみよう等、仲間内でお互いに磨

池澤教育長

永山委員長

石嶋委員	<p>き合いながら自然にレベルアップが図られていくのだと思う。</p> <p>読書習慣や外国語活動といったものは、学習指導要領で求められているレベルだけでは、さらに良い教育はできないと思うので、他にプラスアルファのものを積み上げていければと考えている。</p> <p>現場の先生方から見て何かプラスアルファになるのか、アイデアがあれば出していただき、もちろん、先生方に任せきりになるのではなく、例えば、授業につまずいた子どもたちの補習授業やさらにステップアップした内容についての指導等、地域の方の力を借りながら行っていくことができればより良いのではないかと思う。</p> <p>学習指導要領は「ねらい」が大きく内容も豊富に書かれている。文部科学省の学習指導要領の扱いは、当初は目指すべきものとしていたが、内容を減らしてでも完全習得を目指す形へと移行し、到達基準となったため、学校現場も混乱してしまったという状況があった。学習指導要領の考え方も10年ごとに結構変わってしまうので、学力とは何かという規程的なものとして扱うときりがなくなってしまう。</p> <p>発展的な授業もできるようになってきているので、到達目標を目指して授業改善を丁寧に積み上げながら、子どもたちの集団での学びに生かしてもらいたいと思う。</p>
永山委員長	<p>また、下野市においては支援員の配置について配慮しているところであるが、国では教職員のやるべきことを増やしている割には、教職員の数は増やすことができていない状況がある。</p> <p>現場の先生から、「こういう部分で何か手伝ってくれないかな、このような人材がいてほしいな」等の意見が挙がってきて、先ほどの読書習慣の課題解決や小学校での英語教育のサポート等に役立てるような、良いアイデアが積極的に挙がってくることを期待しているところである。</p>
池澤教育長	<p>「下野市独自に」ということで考えた場合、教育長から何か案はあるか。</p> <p>学力向上に繋げる必要なファクターは、学習習慣の定着であると思う。本日、参観させていただいた道徳の授業の中で、困っている方に声をかけるかどうかという課題を扱っていた。実際にこのような状況に遭遇した時、自然に声をかけることができるのは、日頃からそうした習慣が身に付いているからだと思う。考えて行動するのではなく、人を思いやり自然に行動できるような心を育ててほしいと思う。</p>
永山委員長 池澤教育長	<p>学びが習慣化されている子どもは、学校だけではなく家庭においても学ぶ時間を確保し、予習や復習を行うことができている。そういった家庭では、子どもが学習している間は、親も読書したりするなどの環境づくりができています。下野市としては、地域の方のご協力をいただきながら、家庭教育をしっかりと行い、学びの習慣をつけることが「当たり前の取組」の第一歩であると考えている。</p> <p>学力の向上という点からはどうか。</p> <p>学力は結果的についてくるものであり、しっかりと学ぼうとする習慣が身</p>

永山委員長	<p>に付いてこない、新しいものを学ぼうとする意識は育たないし、学力向上にはつながらないと思う。学校に係る部分も重要であるが、もっと根本的な部分として当たり前のことをしっかり身に付けさせていきたい。</p> <p>子どもたちの力には差が生じてくることから、何らかの形でもっと手を添えてあげないといけないと思う。先生方も時間が限られているので大変であると思うが、分かるから面白い、だからもっと学びたいという良いサイクルになるようなサポートをお願いしたい。</p> <p>今後、新学習指導要領を運用していく中で、やはり授業についていけない子ども出てくると思う。また、学校で学びきれない部分はどうしても塾に依存してしまうケースも出てくると思うので、その部分をどうにかしてあげられないかと思う。</p>
石嶋委員	<p>先生が全てを教えるのではなく、子どもたち同士が教えたり、また教えてもらったりする「学び合い」を行う中で、分からなかったことが分かるようになり、気づけなかったことが気づけるようになっていくことが非常に重要であると思う。</p>
池澤教育長	<p>基礎的な部分で授業につまずいてしまう子ども出てくる。小中一貫教育の中で、どこでつまずいたかということをしきりと捉えて、その子に対してもう一度学び直しができる環境を作っていければと考えている。例えば、いきいき学び塾がさらに発展的に機能できるように、地域のボランティアを入れて対応していければと考えている。</p>
三橋委員	<p>中学生議会の質問の中にもあったが、学校以外の場所で集えるような居場所づくりや、つまずいてしまった子どもたちが教えてもらったり、いろいろ相談できるような体制づくりがさらに必要になってくると思う。</p>
永山委員長	<p>誰かに教えてもらいたいと思って友達や先生に質問している子は、案外授業につまずいていない気もする。</p>
池澤教育長	<p>市内の中学校では学習室を開放しており、英語の補習授業や学校を退職された方にボランティアとして得意な教科を教えてもらうなど、独自の取組を行っているところもある。このような学習室を開放している中学校では、約20～30人の生徒が利用している。</p>
永山委員長	<p>学力の高さは学習塾の力が影響しているように感じるが、そうだとすると、家庭の経済状況によって子どもたちの学習機会が不平等になっているのではないかと懸念がある。学校において補習学習ができる仕組みを下野市から発信できれば良いと思う。</p>
熊田委員	<p>いきいき学び塾のような学ぶ機会があると、授業につまずいてしまった子で経済的に厳しく、学ぶ機会が少ない子でも学び直しができる良いと思う。このように放課後に学ぶ機会を中学校だけではなく小学校にもあれば良いと感じた。</p>
永山委員長	<p>つまずいた子どもを拾い上げられるのは学校の先生だと考える。このつまずきを家庭で引き受けてしまうのは、非常に難しいのではないかと思う。ぜひ、学校において学び直しができる機会を多く作っていただければと思う。</p>

熊田委員	<p>子どもの弱点に応じた補充プリントを配付し、学校や家庭で学び直しができるのであれば良いのではないかと思う。地域の方をお願いをして、いきいき学び塾等の機会に子どもたちに指導することができる環境づくりをしても良いのではないかと感じた。</p>
永山委員長	<p>近年は家に帰っても親が帰っていない家庭も多く、必ずしも親が家にいる家庭ばかりではないので、家庭において全て賄うのは難しい。</p>
池澤教育長	<p>学びたいという意欲については、学校だけではなく家庭においても身に付けさせることが大切だと思う。このような気持ちが、将来の夢や目標に繋がってくる。</p>
永山委員長	<p>以前と比べて大人がフォローする機会が多くなってきているなど感じたところである。</p> <p>他にご意見等はあるか。(特になし)</p> <p>本日は討議ということで結論は出ないところであるが、開始より1時間を経過したため、ここで討議を終了したいと思う。この問題の続きについては、折を見て、教育委員会会議の中で話し合っていきたい。傍聴の皆さまからもこんなアイデアがあるといった場合には、是非ご意見を寄せていただければと思う。</p>
永山委員長	<p>次回の教育委員会は1月18日(木)の午後1時30分の予定とする。</p> <p>本日の議事日程は全て終了した旨を告げ、午後3時40分閉会。</p>